

編集後記

本アカデミー、(公財)農学会および日本学術会議共同主催のシンポジウム「東日本大震災がもたらした食料問題—福島県の現状と課題—」が、昨年11月11日に東京大学農学部弥生講堂で開催された。このシンポジウムを担当された中嶋康博理事がシンポジウム開催記録の企画説明に記述されているように、放射能汚染地域の除染やインフラ整備などは着実に進み被災地の復興は進んでいるが、震災後の10年という節目を超えても、一部に未だに帰還困難地域が残り、原発の廃炉や処理水の海洋放出などの放射能汚染に関する長期的な課題は残されている。農林水産業の分野では、津波や放射能汚染からの耕作地の復旧は進んだが震災前の状態に戻すには未だ多くの課題が残されている。森林に関しては、放射性物質を含む表土流出防止対策が行われているものの耕作地のような除染は困難である。放射能汚染された森林で林業を再開する道筋を考えるには、木材として利用される樹木の汚染の状況を把握し、樹木に取り込まれた放射性物質の今後の変化、動態などを予測するための科学的な基礎データが必要であろう。

本号では、現地で自治体あるいは大学の立場から農林水産業の復興に取り組んでこられ、シンポジウムで「報告」としてご講演をいただいた福島県相双農林事務所の小久保所長(当時)と福島大学の小山教授および二瓶教授に、また、農業統計の視点からコメントをいただいた元福島大学、現北海道大学の小松教授にご執筆をお願いした。ご多忙な中、本会報へのご執筆をお引受けいただいた皆様に厚くお礼申し上げますとともに、福島県の農林水産業の震災からの復興の現状と問題点の理解、および今後の復興とその先の振興に向けての資料として活用されることを期待したい。(松田 幹)